

# 山田琢纂「山田濟齋君年譜略」の解題と翻印（下）

鈴 置 拓 也

はじめに——前号の訂正も兼ねて

本稿は前号に引き続き、「山田濟齋君年譜略」の翻印を掲げる。ただし、本文を掲げる前に前号発表後に誤りが見つかったため、先にそのことを訂正したい。

まず前号の題目についてであるが、これは本来であれば「山田琢纂「山田濟齋君年譜略」の解題と翻印」の後に「(上)」と付さなければならぬところ、筆者の不注意で「(上)」と記載していなかった。ここで訂正をしておく。

また、前号では「筆者は「年譜略」の複写版が二松学舎大学附属図書館の書庫に所蔵されていたのを偶然発見した」と記し、その「山田濟齋君年譜略」が同図書館の書庫に所蔵された経緯について推測をした。しかし、前号での発表後、二松学舎大学職員の菊地誠一氏より同資料の来歴についてご教示頂いた。

菊地氏は平成五年（一九九三）に二松学舎大学院博士前期課程に入学し、一方で当時の陽明学研究所のアル・バイトをさ

れていた時期があり、筆者よりもはるかに当時の陽明学研究所の事情をご存じである。以下は同氏にご教示頂いた「山田濟齋君年譜略」の来歴である。

菊地氏によれば、「山田濟齋君年譜略」は、もともと山田琢氏から二松学舎大学に送付され、封筒に入れられた状態で陽明学研究所に保管されていたという。また封筒に入っているものも原本ではなく複写であり（以下「複写原本」と呼ぶ）、原本の現存は依然として不明である。その送付された時期については不明であるものの、菊地氏はその保存状態などから判断して、おそらくは昭和五十五年（一九七七）の二松学舎創立百周年の記念事業に活用するため、あるいは平成元年（一九八九）機関誌『陽明学』創刊時に、琢氏が資料として送付したのではないかと推測している。

これは、山田敦「山田濟齋・略年譜」を掲載する、平成八年（一九九六）刊行の『陽明学』「山田濟齋特集号」より以前にすでに同資料が二松学舎大学に所蔵され、活用される可能性のあったことを示唆している。また複写原本は、「山田濟齋特集号」が組まれることとなった際、当時陽明学研究所所長の中田勝氏の意向により、各執筆者に配布するため菊地氏が再度複写したとのことで、筆者がはじめに閲覧し得たのは、その配布した内の一つであったと考えられる。そして、最終的に複写原本は、「山田濟齋特集号」の編集終了後、中田氏の意向により、山田家（琢氏）へ返送されたという。

菊地氏はさらに、筆者が図書館の書庫で発見した原稿には欠けていた、「山田濟齋君年譜略」の最終頁を含む複写版を所蔵されており、筆者も一部いただくことができた。これで全七十七枚であったことが判明し、今回、同資料を完全な形で翻印することが叶った。前号での解題及び翻印本文は一人での作業ということもあり、諸々至らない点が多かった。今号での訂正も含めて、さらに広く批正を請いたい。

本稿を記すにあたっては、菊地誠一氏に貴重なご意見及び資料を頂くことができた。ここに記して、心より御礼申し上げます。

凡例

- 一、本稿には「山田濟齋君年譜略」全七十七頁（複写版）の内、昭和二年～昭和二十七年までの記事を掲げた。
- 一、底本の記述の内、誤記と思われるものについては訂正を施し、原文を注で示した。その他筆者による注は本文へ▽内に記した。
- 一、底本の用字は旧字体、片仮名で記されているが、これを適宜印刷用字体、平仮名に改めた。
- 一、年号の後に（ ）付で西暦を挿入し、日付は太字で示した。
- 一、会話文、引用文及び書名・篇名は「」で補った。

【翻刻】

昭和二年（一九二七）丁卯 六十一歳

東京に帰住す。是より先き、東京二松学舎学長 先任児島猷吉郎を欠く。又近く中等教員養成の専門学校新設の企あり、学長を要す。此二件を以て君の帰京就任を要請せらる。君、旧誼を重じて之を諾し、一月五日家族を纏め、多数の旧知に送られ、鹿児島を退去す。六日京に入り、二松学舎々宅に住す。

十九日始て貴族議院を傍聴す。

二月七日二松学舎を代表し、先帝大喪儀を新宿御苑に奉拝す。

莊田霜溪先師四十年祭典及追悼会を開く。

三月昭和報徳会第一回を二松学舎講堂に開く。花田中佐講話。

四月王学会第一回を青山穩原小学校に開く。君の薩中に在る、王学会を主宰すること十九年、既に東歸す。薩摩出身山口九十郎中将来り、又其会を継がんことを要請す。君已むを得ず之を諾し、月次二回講会を開き「伝習録講本」を輯して課書に充つ。軍部大中将六人其他有志凡四十人會員に列す。

陽明会講師を囑せられ、周防の東正堂、先きに京に入り、洪沢青淵栄一の隨信を得て、其事務所に本会を開く。君、毎月出席し隨時講話す。

季男琢、仙台第二高等学校に入学す。君、俱に仙台に赴き、始て松島に遊ぶ。旧友福沢定興東道たり。

六月君、以文会に参加し、余暇文章に努む。会は旧と安井息軒門下の創むる所、中絶已に久し。近者安井朴堂小太郎、息軒外孫・館森袖海等之を再興す。平井魯堂・細田劍堂・荒浪烟厓・林苔巖・川田雪山・加藤天淵等十数子之に加はる。月次一回、城西代木花壇に会集す。

十月斯文会、孔子祭典を挙行す。君、常議員を以て之に列す。式後水野文部大臣講話。

昭和三年（一九二八）戊辰 六十二歳

一月大東文化学院教授を囑託せらる。

二月二松学舎専門学校成立す。国語漢文二科を設け、専ら中等教員を養成す。又夜間課の設けあり。君、校長及教授を担当し、校生を率ゐて中洲師の墓に展して報告する所あり。又大正天皇多摩陵を拝し、高雄山に登て還る。

四月静思館諸子、君の華甲を寿し、饗宴を張る。会は君が造士館に於ける特別門弟の集団たり。

七月鉄道庁、備中に伯備線を布設し、方谷翁退棲の旧址長瀬に駅を置く。諸人の請により方谷駅の名を採用せらる。開通式あり、君之に臨み、又方谷会諸人と翁の墓を展す。

十月「方谷山田先生遺墨集」成る。撮影、編纂総て芳賀直次郎の経営に出づ。

十一月宮中大饗第一日の儀行はせらる。明治神宮外苑に於て饗饌を賜はる。

十二月君、王学会及陽明会講師として陽明王子四百年記念祭及佐藤一斎七十年忌辰祭を麻布深廣寺に行ふ。君二つながら祭文あり。寺は佐藤家菩提寺にして、一斎の墓あり。

昭和四年（一九二九）己巳 六十三歳

君、吟詠教化の志あり。偶々肥後の人渡辺緑村、北海道より入京し、吟詠鼓吹す。君、之を二松学舎に迎へ奨援頗る努む。

五月二松学舎前学長三島雷堂を祭る。

六月内子と日光山・東照宮を拝し、那須・塩原二温泉に遊ぶ。

七月柳井信治の招に応じて、池田蘆州と函根に遊ぶ。

十二月備中新見旧藩地に丸川松隱方谷翁旧師建碑式あり、往き列す。松隱の没する天保二年方谷翁、佐藤一斎塾に在り。碑銘を師に請ふて成る。爾来殆ど一百年、此年始て小学校校庭に刻石建碑す。君祭文あり。帰途倉敷の隣邑西阿知村極楽寺に松隱の墓遺骸埋葬を展す。

昭和五年（一九三〇）庚午 六十四歳

高粱町、松山村と併合の記念式を行ふ。君、招かれて帰郷、参列す。

七月君の薩中に在る、皮膚病に罹る。此月草津温泉に浴療し、望雲樓に寓す、凡三旬。

教育勅語渙発四十年記念式典あり。君「勿令皇上独宸慮、一徳君民万々年」の詩句あり。

君、鹿児島以來頗る作詩に留意す。既に帰京す、詩老国分青厓数詩社を主宰す。君、其興社に参加し、月次一回会集す。

岡本梅外・水野風外・荒浪烟厓・川田雪山・前川研堂・加藤天淵・渡貫香雲等会員たり。

十一月六日先考知足齋君五十年忌辰、帰展して薦事を行ふ。是より先き、君の詩稿を輯して一卷となし、中洲師に評閱兼序文を請ふ。此歳始て「知足齋詩鈔」と題し印行す。

昭和六年（一九三一）辛未 六十五歳

君、漢詩吟詠の課本として「養気集」を輯刊す。皇朝を主とし、漢土作家に及ぶ。爾後十数版を重ね。

二松学舎舎長渋沢青淵栄一没す。悼詩を奠す。

児島星江の永眠を哭す。

二月王学会、「伝習録講本」を講了し、「大学古本」を開講す。

三月二松学舎専門学校昼間部生徒、漢文科検定に合格す。夜間部及国語科不合格。

八月君、東北歴遊の志あり。十一日一の関を経て、千厩町遠藤敏三、木村伯兄女婿氏に投宿、次日巖美溪・中尊寺を觀、舟を狛鼻溪に泛べ夜歸。翌日飯詰駅下車、高階秀彦二松学舎旧門人を訪ひ、次日秋田市に入り、平田篤胤・佐藤信淵の

祠を拝し、五日鶴岡市庄内<sup>⑤</sup>に入り、明治初年薩軍と開城交渉の旧を偲び、十六日山形に向ひ、久保山形高校教授の許に投宿し、次日米沢に上杉不識庵 謙信 及鷹山の祠を拝し、若松会津に入り、白虎隊の墓を飯盛山に訪ひ、北路越後長岡に着し、高橋茂一郎二松学舎旧門人と語る。翌日河井継之助幕末方谷翁の門に学ぶの旧邸を訪ひ、其墓を米涼寺に展し、高田を經、赤倉温泉に宿し、草津温泉に数宿し、二十五日帰京す。此行暑途十六日、君頗る健なり。

九月十九日新聞紙、我兵満州に於て民国兵と衝突、交戦の件を報ず。

昭和七年（一九三二）壬申 六十六歳

三月二松学舎専門学校第二回卒業式、犬養首相・鳩山文相祝詞あり。

五月姪国夫を助けて、仲兄熊田彬斎鉄次郎の二十五回忌祭を行ふ。

六月方谷翁五十六回忌辰、法筵を駒込吉祥寺に設け「先廬不守吾空老」の詩句あり。

八月二松学舎漢文夏季講習会を開く。

十月二十九日越後長岡孔子祭典に列し、「論語」を講ず。次日悠久山に遊ぶ。

十一月早稲田大学師範部生の為め陽明学を講ず。

昭和八年（一九三三）癸酉六十七歳

一月池田蘆州の帰幽を弔ふ。君、蘆洲と斯文会の新年筵に臨み、夜九段坂上に別る。半時の後蘆洲、電車に触れ、其曉没す、齡七十。

二月「高梁古今詞藻」二巻刊行。同人六人の協定に出づ。奥無声主任たり。

三月季男琢、東京帝国大学支那哲文学科を卒業し、金沢第四高等学校に赴任す。君、中洲師の育英詩幅を贖し、又其韻に和し、詩を以て之を畧む。

五月中洲師銅像成る。二松学舎校庭に奉安し、十二日除幕式を行ふ。君告文あり。又「抱經遺範遠、鑄像睿神來」の詩句あり。

七月暑を武州御嶽山上に避け、三島雷堂の遺著「王陽明之哲学」を校す。凡五冊、雷堂の大学院に在る、博士論文として提出す。其没に遇ふて論選に至らず。

君、年来避暑読書の地を物色し、今夏始て野州赤城山上に卜棲す。頗る意に適し、爾後毎夏往き遊ぶ。

十月諸同人と常陸海上大洗祠下魚來庵に遊ぶ。明治六年中洲師登樓賦詩の処たり。翌日祠を拝し、明治記念館を觀、水戸に赴き、西山荘を訪ひ、義公・烈公及朱舜水の墳を瑞龍山に訪ひ、夜歸京す。

昭和九年（一九三四）甲戌 六十八歳

一月君微恙あり。

五月常陸磯浜に、中洲師の詩碑を建つ。其詩に曰ふ「夜登百尺海灣樓、極目何辺是米洲。慨然忽發遠征志、月白東洋万里秋」と。君、除幕式に臨み、次韻左の詠あり。

万里海風吹入樓 蒼碑十丈映沙洲

遠征發慨詩中字 一夢呼回六十秋



八月放送協会の嘱に応じ、陽明学を講ず。一日より十一日に至る。十回を以て畢る。之を輯して「陽明学講話」の著成る。

此月高梁に帰り、先墓を中井村に展す。松香真次郎の東道を以て、鷺羽山に瀬戸内海を縦観し、六口島に象巖を観、讚州琴平祠に詣で、童時母氏に随つて茲に賽せし当年を追懐し、屋島山に登り帰京す。

九月教員検定試験委員臨時委員を命ぜらる十七年迄継続す。

十一月郷儒進鴻溪五十年忌、同志と祭典を東京瑞円寺に挙行す。君、五古の奠詩あり。

昭和十年（一九三五）丁亥 六十九歳

一月函嶺に在り「雪層々底祝新年」の句あり。

四月二松学舎専門学校第一回生、先きに漢文科教員資格を獲得す。国語科は未だし。此月第五回生之を獲得し、歓声校内に湧く。

湯島聖堂復興の挙成る。孔子祭を行ひ、儒道大会を開く。支那・満州・台湾・朝鮮の諸儒来会す。孔子・顔子の裔孫亦其中に在り。君、亦往き列す。

此月鹿児島に赴き、報徳会創立三十五年記念式及会堂落成式に列す。「十年未遂濯纓志。又趁鷗盟入薩州」の句あり。

八月赤城山上に読書す。莊を洞雲と命名す。

九月二十三日東正堂の霊を麻布深広寺に祭り、祭文を捧ぐ。正堂前月一日を以て没す、齡七十六。

十一月清田研三の新婚に奈良市に陪列し、京都に高瀬惺軒博士を訪ふ、在らず。

昭和十一年（一九三六）丙子 七十歳

元日古稀の寿に躋る。左の詠あり。

春入梅花氣自温 東西無恙幾兒孫

老夫七十安天分 只願清名身後存

此月放送協会、大塩中斎「洗心洞劄記」講話を囑す、凡五回。

二月二十三日三男瑛の養父野島彌太郎、其郷備後東城に没す。内子往て其葬を送る。

二十六日暁青年将校兵士一団決起、岡田首相・斎藤内大臣・鈴木侍従長其他重臣を襲撃す。謂はゆる二二六事件なるもの。兵車旁午、都下戒嚴す。二十九日始て鎮定す。其夕内子、横浜を経て還る。

四月始て以髯会に雅叙園に赴く。親友四宮憲章主裁す。頭山満上席たり。美髯者四方より来集する者凡九十人。

此月斯文会、孔子祭典後尚齒会を開く。君、服部宇之吉博士と共に七十齡を以て記念品の贈を受く。

交詢社講会を開く。君、月次一回往講を諾す。

五月九日君、古稀の寿に躋れるのみならず、内子と伉儷五十年、西俗に謂はゆる金婚式に当る。是に於て兒女五男三女四方より集り、君を逗子養神亭に迎へ、寿觴を侑む。野島福太郎広島より、角和歌子備後より来り加はる。

次日君、祝賀第二回を玉川京王閣に開く。木村長兄信行七十七齡を併せ祝す。親近者集る者凡そ四十人、三谷千三・進昌三等幹旋し、木村一男信行長男及琅謝辞を述べ。

二十九日諸知友、君の古稀を祝し、寿宴を上野精養軒に開き、君夫妻を招饗す。木村信行・熊田敬及璋・瑛・琢の三子

陪列す。国分三亥・金子堅太郎・阪本<sup>(四)</sup>鈺之助・島田鈞一諸子祝辞あり。壁間記念贈幅三十余幀を掲げ、頗る盛会を極む。別に油絵肖像一面寺田万治郎画「二十四史」・「四庫全書珍本初集」・祝詩歌幅・金壹封を贈らる。

六月二十六日方谷翁六十回忌に当る。高梁方谷会諸人、献茶追薦式を安正寺に設く。君、次男璋と之に臨む。

八月赤城山上に讀書し、「丸川松隱・三島中洲両先生頌德碑文」を起稿す。

電送局の請に応じ「朝の修養」として佐藤一斎「言志録」を講ず。「言志録と陽明学」の著成る。

此月福沢定興の疾を仙台に問ひ、菊山知事を訪ふ。

十二月季男琢の金沢の寓に赴き、納采の儀を柳町氏に行ふ。下旬共に能州七尾に遊び、和倉温泉に浴す。三十一日大阪駅に下車、次男璋西宮の寓に投ず。

昭和十二年（一九三七）丁丑 七十一歳

元旦西宮の寓に在り。次男と偕に大塩中斎 天満成正寺の墓を訪ふ。長兒琅の疾を鹿兒島に問はんとす、琅固辞す。二日大阪湾口を発し、三日三男野島瑛高知県に在職せるを訪ひ、次日石倉高知校長と得月樓に飲談す。

二月二松学舎六十周年・二松学舎専門学校十周年記念式を挙行す。君、感謝状及記念品の贈を受く。

四月内子と小金井の櫻花を観る。

長兒琅、疾の為め鹿兒島県庁医職を罷め帰京す。

六月君、先きに「漢詩吟詠養気集」を編著し、爾来五星霜、本年放送局の嘱に依り、本朝名詩を講ず。因て更に「養気集」を増補して「精講日本名詩選」と題し、書肆章華社に発刊せしむ。

九月我邦、兵を大陸に用ひ、南進の勝報頻に至る。「四海唯当帰一徳、皇師領略大江秋」の詩句あり。

十月越後高田、孔子祭典に参列し、「中庸首章」を講ず。有恒学舎長増村度次、首として斡旋す。

十一月「大塩中斎」の著成る。君、之を赤城山中に稿し、二松学舎夏季講習会に発講し、北海出版社の請に応じ刊行せしむ。

昭和十三年（一九三八）戊寅 七十二歳

一月、我軍、山東省を収む。曲阜及鄒県皆恙なし。「新年快事孰如此、皇化今覃鄒魯春」の句あり。皇軍曲阜に入る。前一日衍聖公、赤軍の為に拉致せらる。君「功虧一簣千秋恨、赤匪塵侵衍聖公」の句あり。

七月松門吟詠部、夏課を河口湖畔に行ふ。君、往き会し、富士五湖を探り、馬を僦ふて富士五号級に登て返る。「多年登岳志、今復白崖還」の句あり。

九月季男琢、兵役に就き、金沢より岡山聯隊に入る。君、之を岡山に送る。

九月東洋大学講師を囑託す。特に「伝習録」を講ず。十六年迄継続。

十二月琢、征途に上る。君、復之を送り、始て豪溪備中の奇勝を探て帰京す。

昭和十四年（一九三九）己卯 七十三歳

三月備中都窪郡三須村赤浜人士の請に応じて、画聖雪舟の誕生地碑文を執筆す。

五月日本弘道会協賛会員に推薦せらる。

此月伯兄木村信行号水澗の八十齡を寿す。

此月君の主唱に本づき、二松学舎始て孔子祭典を行ふ。君祝文の献あり。

季男琢の戦信に酬ひ「忘生忘死有先訓、得聴何如破一関」の句あり。

昭和十五年（一九四〇）庚辰 七十四歳

二月大東文化学院有志学生、一会を創め、事上会と曰ふ。君に講書を囑す。君、乃ち先づ「王子年譜」を読み、次に「古本大学」に及び、左の詩を賦して之を勗む。

教学失其方 紛々与道岐

何幸有諸子 惜陰培根基

讀書貴心得 徳業致良知

茫茫坤輿上 暗澹戰雲漲

士子行所学 事上有餘師

三月三日有志、築地の蘭亭に茶会を開き、修禊に擬す。集る者国分青厓・市村器堂・杉溪六橋・河井荃廬・小柳読我・土屋竹雨・高田陶軒・柳井寒泉・納明浦・原田尾山・中田雲暉等十余人、君亦与る。茶式畢り、酒会之に繼ぐ。

三月中井村方谷翁墓域の上部山林を上房郡教育会 当時會長石井謹一郎に寄贈し、方谷園經營の資に充て、且つ右墓域及長瀬塾址の碑の永久管理を委嘱す。

五月上房郡教育会は、皇紀二千六百年紀念事業の一として、春季総会を中井村に開き、方谷翁を祭る。君帰展、講演す。

六月高梁有志、市人の出なる原田亀太郎を顕彰す。亀太郎は森田節齋に学び、大和義挙に加はり、元治元年京都に斬らる。今を距る七十七年、時に年二十七、道源寺に葬る。君一絶を奠す。

八月佐久間洋行峻齋の招に応じ、其郷千葉県茂原に遊ぶ。

十月函山に静養し、「陸象山学案」を起草す 十六日至二十五日。

十月三十日文部大臣請ふて、天皇陛下の行幸を仰ぎ、教育勅語渙発五十年式典を明治神宮外苑に挙行す。君参列す。

此月東京府教化団体聯合会は、本府に於ける教化事業に尽瘁せる功勞に依り、東亜報徳会及斯文会を経て、君に感謝状を贈る。

十一月三日帝国教育会は、皇紀二千六百年及教育勅語渙発五十周年を記念し、神田教育会館に於て、五十年以上教育に従事せる者の表彰式を行ふ。君之に与かる。

十一月十一日宮城外苑に於て、皇紀二千六百年奉祝の式典あり。天皇皇后兩陛下臨御あらせらる。君、陪列の榮に浴す。又多年高等教育に従事するの故を以て、特に勲三等に叙し、瑞宝章を賜はり、又祝典記念章を授与せらる。君、左の詠あり。

二千加六百 皇紀与天符

叡慮昨頒勅 聖恩今賜醜

御溝松色鬱 禁苑菊花舖

四海波何処 揺天万歳呼

十一月十六日伯兄木村信行没す、齡八十一。品川寿昌寺に葬る。

十二月「済齋詩鈔」刷印成る。君、古稀七十齡を記念し、兒子の請に応じ、詩文稿印刷の企あり。先づ詩稿を整頓して、各体計六百十四首を得、乾坤二巻を印刷す。此月漸く成る。文稿は機を失ひ、荏苒刊行に至らず。

昭和十六年（一九四一）辛巳 七十五歳

一月斯文会の参与を委嘱せらる。

二月内子旧臘来、季男琢の長兄安之の病の爲め金沢に在り。其躬却て病む。重患の報に接し、四日急<sup>マ</sup>扱<sup>マ</sup>往き問ふ。病況頗る順、八日帰京す。

四月再び金沢に赴き病後の内子を護し帰京す。

五月陽明会、昨夏以来中絶す。会員齋藤富・松田茂幸等悃誠已ます。乃ち再興を諾し、毎月鉄道協会に「王子年譜」及「莊子秋水篇」を講す。

七月吟詠部員吟詩を南総海上に練習す。君、部長渡辺緑村と之に参ず。講師小幡博二松専門卒業三たび召集に接す。君一詩を贈る。「男子豪快有如此。三肩銃劍向辺城」の句あり。

九月東洋文化学会長平沼騏一郎、時局と人心との關係坐視すべからざるを憂慮し、君に評議員を囑託す。

十月新内閣成る。第七高等学校造土館出身東郷茂徳外相に任ず。昨歳同出身石黒忠篤農相たり。君、一絶を賦し両相に贈る。

多年造土薩之中 時急廟廓誰奉公

昨有司農今外相 都城百二仰雄風

十二月大東亜戦争宣布。八日真珠湾快勝す。

昭和十七年（一九四二）壬午 七十六歳

一月十五日星港陥る。君、詩句に云ふ「百年堅砦今何在、南太平洋旭旆風」と。  
落合東郭、熊本に没するを哭す。哭詩に「七十生涯詩万首」の句あり。

二月季男琢、戦地より還る。征戦五年に渉る。金沢より来省す。君「喜汝数超生死境、梅花春浅凱歌還」の句あり。

六月二十二日天皇、特に教育振興の大御心を垂れさせ玉ひ、宮中西溜の間に出御し私立大学予科長・専門学校長・高等師範学校長・実業専門学校長等高等学校会議に参列の諸員に、列立拝謁を仰付らる。殊に今回は私立大学予科長並に私立専門学校長を加へられ、君亦其列に陪す。橋田文部大臣は全員を芝公園三縁亭に饗応す。

七月二松学舎専門学校卒業及在学生徒、従軍する者少からず。君、左の詩を賦して之を鼓勵す。

吾徒豈可落人後 投筆提戈勦外醜

報效會期繼往賢 此心独不負師友

此月櫻井成明を城西駒留八幡祠側に訪ふ。古典科漢書課後期同学三十余人、今存する者二人のみ。成明は君より長ずる二歳。

十月東京報徳会堂成る。四十年記念大会を挙行す。

十二月是より先き長男琅、大阪府吹田保健所長に就職す。君、之を訪ひ、共に高梁に帰展す。君、明年喜寿を期し、帰住の素志を果すべく、心期し、聊か予画する所あり。左の二絶を賦す。



此生閱尽幾風塵 老去人情故國親

碧水青山依旧好 喜吾歸計在明春

桂玉都門知拙謀 四時有序我宣休

故園何処結茅舍 紅葉青山水急流

昭和十八年（一九四三）癸未 七十七歲

一月三十一日斯文会編輯部主任高田真治博士等、敬老会を東中野日本閣に開く。井上哲次郎八十九・国分高胤八十七・松井簡治八十四・市村瓊次郎八十・瀧川龜太郎七十八・古城貞吉七十七及君の七人、賓位に就く。

此月弥々退職を公請す。三月二松学舎は学長兼教授を、専門学校は校長兼教授の任を解き、退任式を行ふ。校生二百余人参列す。特に二松学舎名誉学長及専門学校名誉校長を囑託せらる。校生は別に送別会を開いて別を惜み、紀念品を贈て餘情を表す。

大東文化学院 君の教授を解き、名誉教授の称号を贈る。君、左の詠あり。

鞠育思堪記 齡延喜字年

処身無大過 秉鐸致微涓

草木花開落 功名人後先

歸休及今好 白髮旧青氈

君、王学会の講席を宰すること十七年、会中諸子、陽明會員と謀り、君を目黒驪山荘に招響して別を叙す。君、左の詠

あり。

姚江東派探珠不 承乏講筵十七秋

斯学一心師法在 時艱祇合贊皇猷

四月五日始て古河に赴き、熊澤息遊軒蕃山の墓を展す。「二代偉人名早伝、白頭来拜又因縁」の句あり。

五月九日君、東京を離れ、西帰の程に就く。初め高梁町片原町に寓し、翌六月大工町の自邸に移る。庭に老梅あり。先づ有梅荘の名を命ず。双柿門を挟む。又双柿舎と曰ふ。紺屋町谷数十歩にして近し。時に紺溪精舎の名を用ふ。西山の夕陽殊に幽栖の趣を添ふ。乃ち夕陽好処と号す。

六月二十六日方谷翁六十七回忌、君、出郷六十年、始て帰田、祭事を先塋に修む。左の詠あり。

帰住幸逢斯忌辰 祭君不復旅途人

松楸無恙方溪上 斜日墳前白髮新

内子と、三男野島瑛を松江市に訪ひ留宿す。

七月高梁の諸人、君の帰住を慶し、君夫婦を方谷林下風月樓に招饗す。

岡山県詩文聯盟会結成せられ、七月十七日総会を岡山に開く。君、名誉会長に推さる。

長兎琅、吹田より帰省す。

九月備前閑谷鬢、孔子の積菜を行ふ。君、往き参じ、更に蕃山村を訪ふ。熊澤息遊軒の宅址あり。明治七年、当時の閑谷校生、方谷翁の為に小廬を茲に築く。翁屢往き遊ぶ。今廬廢し碑建つ。

十月備前鹿忍村に、益田蓬洲の表彰式あり。往き列す。

季男琢、姫路に入隊す。

曾祖考 五郎吉百二十五年忌、曾祖妣百二十六年忌の薦事を挙行す。考妣は吾家本と武門にして中途衰落せるを慨し、望みを方谷翁に属す。翁果して家を興し、考妣の期待に負かず。泉下の喜知るべし。

十月同志を結集して汲古会を創め、月次君の家に会し、主として旧藩の史実文学を討究す。会名は韓退之の「帰愚識夷途、汲古得修練」に取る。

十一月北備刑部の郷を訪ふ。方谷翁の塾址あり。旧門下諸人茲に小園を招き、記念碑を建つ。君「秋風六十七年遠、探遍先人遺愛村」の詩あり。

此月方谷会数子と翁の開墾に係る旧址瑞山永山を訪ふ。長瀬の対岸山腹に在り。翁の築きし小廬猶存す。

君、詩社を創め、社友と高梁十勝を撰す。

- 一、八重籬曉櫻
- 二、方谷林松籟
- 三、高梁川清湍
- 四、方谷橋晚涼
- 五、愛宕山明月
- 六、臥牛山丹楓
- 七、雞足山霧海
- 八、高倉山残雪
- 九、松山城雄閣
- 十、頼久寺林園

十二月十五日赤穂に遊び、大石神社を拝す。義士報仇二百四十二年に相当す。

「帰休雑感」七絶十三首五律三篇成る。

昭和十九年（一九四四）甲午 七十八歳

一月聾頗る進む。新年左の作あり。

帰休昨夜故郷人 梅気鳥声年又新

試筆不妨聴力退 題箋先祝半聾春

此月十五日農林相石黒忠篤、途を枉げて来り訪ふ。農林相は第七高等学校第一回卒業生たり。君、詩を贈て「仰君国策賢劣外、又礼旧師過僻村」の句あり。

三月季男琢、第二回の応召より除隊、帰家す。

四月君、多年の意志に本づき、「方谷全集」の纂輯に着手せんとす。高梁方谷会の諸人、之を賛し方谷全集編纂刊行会を設く。君、又県庁を訪ふ。時の橋本知事清吉及内政部長西岡廣吉頗る其挙を奨賛す。社会課長守屋茂は岡山市第二中学校教諭芳原一男二松学舎専門学校卒業を高梁中学に転任せしめ、君の事業を援助せしむ。乃ち此月を以て史室を君が家に設け、纂輯の緒を開く。郷人杉木孝太郎亦写字を助く。君、遠近諸家に材料の提供を求め、又必要に応じ出向調査す。左の詠あり。

全集写全貌 深嗟無似身

時過難以証 材衆奈何掄

子々盲摸象 茫茫航失神

順天人努力 五字方谷翁所主持 五字冀完真

此月備前牛窓及美和村報徳会に往講す。

五月君、主張して高梁二十五賢の追遠会を挙行す。畢つて二十五賢の略伝を講話す。

六月石川梅次郎二松学舎専門学校第一回卒業東京より来り訪ふ。

川田順甕江季男東京より来遊す。俱に阿哲峽の勝を探る。

十月作州に於ける方谷翁行教の迹を歴訪す。曰く明親館、久世に在り。曰く知本館、大戸に在り。曰く温知館、行信に在り。皆旧址を存す。

十一月季男琢、長兄安之七歳を携へ金沢より来省す。偕に中井村先塋を展し「今日英靈奈何慰、曾孫(琢)別伴幼玄孫(安之)」の詩句あり。

時に戦報頻に我に利ならず。御前社に必勝祈願の会あり。少年神風隊続々戦地に向ふ。君、古詩を賦し「嗚呼昭和神風亦何疑、颯自稚鷺翼下吹」を以て結ぶ。

作州津山の有志方谷会を開く。君、招かれて往き列す。又本源寺を訪ふ。旧藩時方谷翁、砲術を此地天野直人に伝習し此寺に宿し、夜は有志の爲め「古本大学」を寺中に講ず。又始て院庄に作楽神社を拝す。

十二月高梁公会堂に於て松山精神を講演す。

昭和二十年(一九四五)乙酉七十九歳

一月二日東亜報徳会首唱者及理事長花田仲之助号松陰鹿兒島に没す、齡八十六。君葬儀委員長として之に臨む。已に葬儀を了す。同志理事長後任を君に擬す。平素事務は桃山及東京各々其人あり。君已むを得ず之を諾す。

三男野島瑛、島根県農務課長を罷め岡山農業会常務理事に就職し、高梁に定住す。

三月十日米機東京を襲ひ、二松学舎災に罹る。君悵然多時、左の詠を国分理事長・那智学長に贈り、善後の事を囑す。

敵機吐火禍災延 不怪二松無独全

偏願諸君護持力 再教余夔鬱参天

四月九日季男琢、三たび召集に応じ、金沢より広島に至る。

八月六日米機原子爆弾を広島に投ず。

此月十四日午前御前会議あり。聖断大東亜戦争を停戦し、各国共同宣言受諾の大詔渙発あらせらる。「万世の為に太平を開く」の論言あり。君感慨の余、数詩を賦す。其一に曰ふ、

恩讐一路事蝸争 安得人間致肅清

聖旨崇高懸若日 敗余臣子有余荣

九月二日季男琢、大東亜戦より還る。君「家本武門依汝振、征衫一領照庭闈」の詩句あり。

十一月桃山に赴き、花田 仲之助 神社鎮座祭に列す。桃山御陵に謁し、更に京都に高瀬惺軒博士を訪ふ。

此月十七日内報あり、「女婿山田慶治、軍属を以て南洋マーシャル列島に戦死す」と。八月一日二男二女あり、母氏栄子の下に遺孤となる。

此歳君「三島中洲先生誕生地碑」の碑文を起草す、凡そ一千五百字。那智惇齋曰く「真是大手筆、百代不朽」と。

昭和二十一年（一九四六）丙戌八十歳

元日左の詠あり。

四海年新淑氣同 奕棋世事感何窮

国恩未報人空老 天地猶容八十翁

四月二松学舎忠僕長谷川喜熊七十三歳約を踐して来り訪ふ。共に二松学舎旧舎長三島雷堂未亡人を水田村に候問す。君、其忠愾に感じて贈詩あり。

六月次男璋上海に在ること九年、四月帰朝。此月高梁に帰展す。共に先塋を展す。

此月東亜報徳会重要会議を桃山に開く十四、十五両日。君、理事長を以て之に臨み、時局に感ずる所あり。衆に謀を本会の解団を決議す。「先臣四十六年業、一日解盟余恨存」の詩句あり。本会は旧称に本づき、数年来東亜の二字を冠す。

七月暑殊に甚し。晚涼を方谷橋に取り、十五絶を賦す。

停戦後、「言志」と題し七律を賦す。「至尊有淚千官哭。主將無謀万骨枯」の句あり。

八月刑部町青年団夏季講習会の請に応じ赴講す。

此月関谷糞積業を行ふ。君、往き列し「論語」中「去兵去食民無信不立」の章を講ず。

十一月長尻瓊、双親年老ゆるを以て、大阪吹田保健所長を退職し、帰養す。君「百里江山孝子帰、霜楓着錦映征衣」の句あり。同時に高梁烟草専売公署医となる。

十一月、前月旧友奥無声忠彦、東京より帰省す。此月一日君、詩社を自邸有梅荘に開いて之を迎ふ。会する者赤崎霜山・小倉魚禾・芳原翠陰・菊染春塘等六人、無声、社名「清流」を選提す。爾後清流吟社の名を用ふ。

十一月二十三日君、八十回誕辰、親族故人集り寿す。

此歳浅口郡西阿知郷人の請に応じ「三賢碑」の文を作る。三賢とは丸川松隱・山田方谷・三島中洲を謂ふ。此地松隱の

誕生且つ終焉の地たり。方谷と中洲とは其学統に属す。

昭和二十二年（一九四七）丁亥八十一歳

二月八日内子春野七十七回誕辰、邦俗喜寿の称あり。且つ伉儷六十一年に及ぶ。君、詩を賦して慰謝し「負慈儉素育多  
児、君是吾家興家媼」の句あり。

此月学友桜井成明を哭して詩あり。数年来大学古典科漢書課同学三十余人、成明君及君の二人を存す。君、詩を贈て成  
明の保健を勧む。成明の家人報じて曰ふ「昨春成明已に逝く」と。君、悵然詩を賦し「同人二十独吾在、淚落如瀧哭彼  
蒼」の句あり。

三月「方谷全集」纂輯の業略ぼ竣る。蓋し三年を閲みす。左の詠あり。

祖翁全集就 三歳一匆匆

其奈吾才短 且欣衆助隆

先人貴時処 斯世有窮通

石室蔵還好 百年論自公

君、芳賀直治郎・芳原一男二子の「方谷全集」幫助の勞を謝し、晚餐の饗を借にす。左の詠を贈る。

老余今覺我肩輕 俠助有人編略成

三歳酬勞奈此薄 春蔬摘得啜雞羹

君の全集に於ける、世相劇變、固より刊行の望み難きを察知し、筐蔵伝家の計を為す。



五月三日新憲法発布、東京に祝典あり。天皇親臨あらせらる。高梁町亦祝賀式を小学校講堂に挙ぐ。君、町民を代表して祝辞を述べ。

玉野市の老詩人立石苔華屢來遊を促す。此月始めて其約に赴く。

六月倉敷市鶴陵吟社第一回に赴く。初め市の紳商且つ好詩家窪田貪泉茂一來り訪ひ、君を迎へて詩会を創めんことを請ふ。君、月次一遊を約し、十六日始めて此行あり、同人十余人。君左の詠あり。

笑我老境漫吹竿 猶喜南方盟不孤

梅雨一天雲放霽 詩魂飛入古倉敷

七月成羽の郷に信原氏を訪ひ、故の藤蔭機の墓を展し、帰途阿部の里に西林美貴男を訪ふ、在らず。「故人不識那邊去、雨晴英雄埋骨村」の句あり。英雄は山中幸盛を指す。

九月女婿毛利英雄の招に応じ、呉市に遊ぶ。太刀掛呂山重男來る。田森素齋長次郎亦広島より來り会し、唱酬歛を尽す。

「高梁近郊三十六詠」を賦す。国分漸庵曰く「真に是れ一篇の風土記」と。

聖駕、本県に巡幸あらせらる。君「歛声百里擁龍駕、皆道人間天子來」の詩句あり。

昭和二十三年（一九四八）戊子八十二歳

二月秋本耕齋運曉医学博士、早島より來り訪ふ。博士九阜吟社を創む。

「陸放翁詩集」を読み五絶句を賦す。其一に曰ふ、

国讐何日報 意気掃千軍

天不祚南宋 空留翰墨勲

井山寶福寺主岡田熙道、総社の茶伯白神洞山富太郎と相携へて来り訪ふ。

三月鶴陵吟社例会後、児島郡粒江村郷土史家永山玄石卯三郎に迎へられ、往き宿す。

中道会の為め「中庸」を講ず。

四月本県人にして二松学舎専門学校を卒業せる諸子、君の家に会す。君、三同会の名を命じ「同学同門又同県、三同何忘旧精神」の句あり。

鶴陵吟社会集の後、四男三宅璜の寓に投宿し、翌日両孫望夫・常夫を伴ひ、酒津の桜花を観る。又秋本耕齋に早島に迎へられ城山の桜を賞し、小学講堂に講演し、九阜吟社に臨む。

此月同志京都に集り東亜報徳会の残務を商議す。君腎臓病を急発し、赤十字病院に入院受療す。在院七日、頗る愈ゆ。長兄に迎へられ帰郷す。「天幸使吾保余喘、落花時節向家山」の句あり。

八月作州湯原温泉に浴遊す。巖湯最奇なり。「曉浴倚巖何所見、鯢魚出没月痕寒」の句あり。帰途真賀温泉三船氏に憩ふ。往年藝藩頼杏坪 頼山陽叔父来浴、盛に温泉の効を頌して七律の作あり。方谷翁歸幽の前年、又此に浴して詩あり。後人之以本づきて「金泉余滴」を輯す。君、亦杏坪に和して七律の作あり。他数首を賦す。

十月痰咳を病む。「二豎啖兼咳、喉間鳴有声」の詩句あり。

女婿鹿兒島在住医学博士村田豊成、東京医師会帰途来り訪ふ。

「済斎文存」を輯す。「初年集 東京」一巻・「中年集 鎮西」二巻・「後年集 東京」三巻・「晩年集 高梁」一巻、君賦して

曰く

平素業緒雖卓矣 雞肋捨來聊後爾

一部濟齋文幾篇 豈言小道進乎披

高梁対岸ちかの近似的の里、高僧玄資菴居の址あり。後人相承けて草庵を営む。往年鴨方の西方拙齋來遊し「彼岸依稀千歳後、

慈航誰繼旧風流」の詩句あり。拙齋は備中聖人と称す。君、賦して曰ふ、

玄資谷昔駐師儒 高節千秋志相符

何幸備中聖人在 于今桑下聖僧無

十二月除夕に際す。七律を賦し、前聯に曰ふ「逝波空灑孤臣淚、逐臭難回大衆心」と。時に戦犯者死刑の事あり。尾聯に曰ふ「近時間讞非邪是、且酌残醪餞歲陰」と。

君、「養老五則」の撰あり。(一)省慮(二)慎動(三)節食(四)善眠(五)寡欲と。荒浪烟厓曰ふ「人能守斯訓、勿藥可至期頤百歳」と。

昭和二十四年(一九四九)己丑八十三歳

元旦五詠の一に曰ふ、

時運未巡年序巡 遭逢八十又三春

端居誰駁老貪寿 皇路待看風日新

此月政府文部官恩給を増率す。君「恩俸聊遭增米錢」の句あり。

二松学舎専門学校大学昇格の栄允を蒙る。

四月再び秋本博士に招かれ、早島に桜花を賞す。納所松堂を訪ふ。庭に古松六株あり。近年皆枯る。君、静菴の号を贈る。白神洞山、八十寿茗筵を総社郷の寓邸に開く。君招かれて往き列す。次日共に井山寶福寺を訪ひ、又翌日吉備郡箭田村吉備寺を訪ひ、吉備真備の墳を拝す。

十一月先考知足齋君六十九回忌辰、君病む。内子代て中井村先塋を展す。

秋本耕齋・納所静菴聊袂来り訪ふ。静菴、其の自雕する所の梅花盆を贈る。

小西旭梁 良次 始て来り訪ふ。

昭和二十五年（一九五〇）庚寅八十四歳

元日七律を賦す。後半に曰ふ、

齡届八旬加四年 文存二百有三篇 旧臘所輯

時艱不許災梨棗 窮谷唯当抱汝眠

三月君、多年の教学に努む、又晩年「方谷全集」を纂す。本県為めに表彰式を県庁に設け、文化章第二回の贈あり副賞添ふ。君、祖考全集の世に認めらるゝを喜び、左の一詩を賦す。

免冊只当幽谷蔵 何栄公選被優彰

蠹余断爛旧文化 又博世誉登顕場

高梁町は君の本県文化章を受けたるを栄とし、又表賀式を設けて之を慶す。方谷全集編纂刊行会の諸人曰ふ「『方谷全集』刊行の機至る」と。之を西岡会長時に内政部長より知事たり其他に謀つて進捗を計る。本県出身笹部貞市郎、東京に在

て開版の事に当る。

七月韓地兵争あり。君詠じて曰く、

人間好闘争　何以至斯極

咄々北方強　鬼乎将又蠹

八月清流吟社第十一回を中尾氏楠氏書院に開く。来り参する者始て十七人に達す。会友君に「清流帖」を贈る。帖中詩画皆君の文化受章を揄揚す。

十一月君、従来心臓に弱点あり。頃日呼吸頗る迫る。最も歩に艱み、殆ど平臥静養す。試に辞世に擬し左の詠あり。

及今謝々草堂靈　八十四年灯影青

残景好追西澗月　巖花点点水冷々

二十三日又左の詠を試む。

老病斯身可奈何　誕辰八十四回多

幸無司命吝于我　来歳看花猶一過

十二月季男琢の配友子、病で金沢に没す。齡三十六、三男二女あり。

昭和二十六年（一九五二）辛卯八十五歳

元日六詠、其一に曰ふ、

今歳不和和那時　曆回天地入春熙

残軀有願君知否 欲賦興邦第一詩

二月「方谷全集」第一冊刊行成る。君、去冬以来家居静養、全集刊行の事殆ど刊行会員東・赤崎・森沢・芳賀・金岡・笹部数氏の手に委す。厚誼感謝の辞なし。

老友川田雪山、東京に没す、齡七十一。君嚮きに其の「雪山文集」に序す。未だ刊成に至らず。其人下世す。残恨知るべし。

四月八日君、昨冬の志願成り、東上方谷林及御前祠下の桜花を縦賞す。媳芳子護持す。君、短古を賦す。「嗟爾何術謝司命、不似人間約易差」の句あり。

岡山市書道の篤志家、山陽書壇を創立し、書道誌を発行す。君推されて会長となる。君毎に曰ふ「己れ書道最拙なり」と。面皮の厚知るべし。

六月七日閑谷齋、創立二百八十年記念式を挙げ、併て釈菜を修む。君例に依て詩篇を献奠す。

君、中年疥を患へ老後頗る頑、偶々「元遺山詩集」を閲す。詠じて曰く「半年臥床席、虐我疥亦頑」と。又袁隨園の詩に曰く「頑癬如頑妻、一來不可点」と。君謂ふ「文豪と疾を同じくす。亦慰むべし」と。「搔癢通宵人若瘰、天何侮老一安慳」の句あり。

六月十日郷友又幼友なる奥無声 忠彦 東京に没す、齡八十三。君哭詩あり。

此月「方谷全集」第二冊成る。

君、老馬の詩十数篇あり。詩友之に和す。

七月高梁に敬老会の挙あり。君内子八十一と之に列す。

高梁小学校創立八十年記念式を挙行す。第一回卒業生に国分漸庵三亥健在す。第三回に君を存す。他は十数回を後る。君両絶を贈て之を慶す。

八月「方谷全集」第三冊刊行、全部完成す。君、五古三十二句を詠じて感喜を表す。

十一月加藤天淵虎之亮博士及石川濯堂梅次郎、二松専門卒広島学会の帰途相携へて来り訪ふ。歛然話旧時を移す。

高田陶軒真治博士来り訪ふ。往年博士の斯文会編纂委員長たる、敬老会を東京に開いて国分青厓等七人を賓饗す。今皆亡し、独君を存す。感慨知るべし。博士時に謂はゆる追放の厄に罹り猶脱せず。君「何妨今猶追放人、不容而後見君子」の句あり。

十二月忘年会を催し、方谷全集刊行会主任の東・赤崎・森沢・芳賀・金岡五子と举杯相慶す。君、左の詠あり。

方翁刊集畢 歳尾酌芳醪

快飲年堪忘 不忘五子勞

昭和二十七年（一九五〇）壬辰八十六歳

元日五詠、其一に曰ふ、

年邁何須嘆老朽 春風昨夜入殘齡

八旬加六妻加二 寿酒聊耐酌祖靈

一月五日吟詠報国会首唱者渡辺緑村東京に没す。君二十余年の旧誼あり。長古を賦して之を弔ふ。

四月金子清超及苔花夫妻、東京より来り訪ふ。一宿旧を叙す。夫婦書道を以て鳴る。清超は二松専門学校を卒業す。

五月三日東京皇居前に講和成立独立記念式典の挙あり。天皇親臨して祝辞及決意を表明せらる。屈辱八年を経て始めて此事あり。君老齡、感激特に深し。短古三章を賦して志を言ふ。又別に五絶の詠あり。

九月頃より君は体力漸次衰退し、十一月に及びて益々甚だし。二十三日の誕辰を迎ふるに至らずして、二十一日に終に永眠す。高梁町頼久寺にて告別式を執行するや、会葬する人士数百人あり。次いで中井村定光寺にて本葬をなし、祖先の塋域に遺骨を埋葬す。法号を儒宗院豊学道進居士といふ。

君、著書大略左の如し。

- 一、禹域財政概論
- 二、箋註十八史略
- 三、方谷先生年譜
- 四、西郷南洲翁遺訓及遺文
- 五、一得録 未刷
- 六、老子講義
- 七、伝習録講本
- 八、陽明学精義
- 九、佐藤一斎言志録私抄
- 十、漢詩吟詠養気集



- 十一、精講日本名詩選
- 十二、言志録と陽明学
- 十三、大塩中斎
- 十四、洗心洞劄記摘註
- 十五、陽明学講話
- 十六、濟齋詩存二卷
- 十七、濟齋文存七卷未刊
- 十八、歸休詩存二卷未刊
- 十九、山田方谷全集三卷

山田濟齋君年譜略畢

- (一) 底本「貌美溪」に作る。
- (二) 底本「飯詰駅」に作る。
- (三) 底本「莊田」に作る。
- (四) 底本「坂本」に作る。
- (五) 底本「山中」に作る。
- (六) 底本「直次郎」に作る。